



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	社会福祉研究と私：最終講義要旨(中井健一先生退官記念)
Author(s)	中井, 健一
Citation	[岐阜大学地域科学部研究報告] no.[8] p.[213]-[223]
Issue Date	2001-02-25
Rights	
Version	岐阜大学地域科学部 (Faculty of Regional Studies, Gifu University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/4489">http://hdl.handle.net/20.500.12099/4489</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

---

## 中井先生退官記念

---

### 社会福祉研究と私——最終講義要旨——

中井 健一

#### My social welfare studies

Kenichi NAKAI

#### 1. 社会福祉研究の道に入る(生いたち)

##### (1)

私がこの道に入ったのには生い立ちと深い関係があります。まずそこから話しを始めなければなりません。

私は1937年名古屋市で生まれ、6歳までそこで過ごしました。6歳のとき父が不慮の事故でなくなり、いわゆる母子家庭となりました。当時は戦争の真っ最中で母子家庭の強制疎開により岐阜市にやつてきて、小学2年生(当時は国民学校2年生と言っていましたが)1学期途中まで華陽小学校に通いました。ときどきアメリカの飛行機が超高空をちょうどおもちの飛行機ぐらいに見えましたが、真っ青な空を背景にビラをまいていきます。たぶん空襲の予告か、降伏を求めるビラだったのでしょう。いよいよ岐阜もあぶないということになって(その後の記録では岐阜市の大空襲は1945年7月9日となっている)母の郷里である岐阜県白鳥町前谷、今上映中の「郡上一揆」の主人公、前谷村定次郎の生まれたあの前谷に疎開しました。

さて、私達の母の世代、いま80歳代、90歳代の人々は山本茂実さんの「ああ野麦峠—ある製糸女工哀史—」(角川文庫に収まっているのでぜひ一読をおすすめするが)に描かれたあのままの少女時代をすごしています。12歳、小学6年を卒業すると同時に糸ひきの女工として働きにでる、親元をはなれ、工場の寮に入り、1日十数時間の労働に耐えてきた人達です。

話は少し飛びますが、皆さんの中には高島先生の社会福祉原論の授業で「おしん」第1編、おしんの少女時代を描いたビデオを見ている人がいることと思います。「おしん」はサクセスストーリーだと一蹴する人もいますが、見る焦点のあてかたによってはそういう評価もあるのかと改めておどろきます。しかし、私などはおしんの少女時代のあのすざましい貧困に息をのみます。わずか米1俵と引き換えに、口減らしのため7、8歳の少女が住みこみ奉公に出ていくわけです。おしんの少女時代は明治の末、日本がちょうど産業革命を

達成した直後で日本資本主義の発展期にあたります。ところでおしんを苦しめた貧困はどこからきたのか、私もこの授業を手伝った縁で皆さんのレポートに目をとおしました。「かわいそうだ」「信じられない」「私達は幸せだ」という類のレポートはいっぱいありましたが、一人だけおしんの苦しみの背後にある社会構造に迫ろうとしたレポートがありました。わたしは彼女の日頃の勉強をよく知っていたからさすがと思ったものですが、要するに天皇制のもとでの地主・小作関係、この社会構造がおしんの苦しみの根源であつたわけです。わたしの母もこの社会構造のもとで生まれ育った、おしんと違い小学校だけはまあなんとか出してもらえた。しかし地主の娘たちのように高い教育を受けることもできなかった、技術を身につける機会もなかつた。したがって、頼っていた大黒柱に死に別れたら、子どもを育てることは塗炭の苦しみ、赤貧洗うがごとしと言う言葉がありますが、毎日子どもに食わせるために日銭がせぎにでる、まさにハンド トゥ マウスの生活を余儀なくされる。これは当時の母子家庭の多数の境遇でした。華陽国民学校では戦時中の食糧難で、昼お弁当を持ってこれない子がたくさんいました。私も食糧難という一般的な状況にくわえ、先にのべたような母子家庭一般が遭遇する貧困のため、欠食児童の一人でした。ところが、当時貧困家庭には給食があり、雑穀の入ったごはんには梅干のアルミ弁当箱、味噌汁がついていました。学校へ行くと当時の呼び名で言う「こずかいさん」の部屋の自分の名札をひっくり返しておくとお弁当が届く手はずになっていた。しかし私はなぜか今でもよくわからないのですが、得体のしれない屈辱感があって、名札を裏がえしに行くことに非常な抵抗があった。このため昼ごはん抜きでがまんをしていました。その時間はいつも学校の裏で遊んでいた。日本には高度成長期の前半、1960年代の前半までこのような子ども達がたくさんいたのです。土門拳さんの写真集「筑豊のこどもたち」（築地書館から復刻版がでています）には、まわりがみなお弁当を食べている子どもの中でひとりだけ「りぼん」という少女雑誌を見て耐えている子の写真があります。余談だがこの写真集をみた学生の第一声「先生、“りぼん”ってこの頃からあったんですか」にはわたしもひっくり返つたことがある。もっと写真の意味を読み取ってくれと思わずどなるところだったが、これはいつものようにがまんした。

さて、何を言いたいのか、私が後に社会福祉研究に入っていった原点はここにあったということです。中学生ぐらいになるとなぜこの世の中には貧しい人と富んだ人がいるのかなどとより鮮明な問題意識を持つようになりますが、それはもう少し先にお話します。

原点というのは今でも生きていて、以前ある市の教育委員会に勤務していて、子ども達によく接する機会がありました。その時でもかならず子ども達のお弁当に注目していました。競争のようにしてお母さん達がつくって持たせたきらびやかな3色弁当に混じって、パン1個、おにぎり1個の子が必ずいる。その子の家の家計とか、もしかしたら父子家庭でお父さんは長距離トラックに乗っているのではないだろうか、またもしかしたらネグレクトにあっているのではないだろうか（ネグレクトはチャイルドアブユースのひとつであ

る)、等々いつもそういう子ども達に注意を向けていました。そういう子ども達の悲しさ、苦しさが感覚的にもよくわかるのです。

## (2)

次に進めます。2年生1学期途中から当時の北濃村の小学校分教場に通うことになります。感覚的にわかると言う話をもうひとつします。母は私の妹(当時4歳だったが)をつれて“こんろ”(炭火をおこす家庭用品、当時どこの家庭にもあった。粘土を成型して作る)を作る工場や製材所へ働きにっていました。保育所は大都市の貧困地帯にはすでにあっただが、当時の田舎にはまだない時代で、妹は工場の片隅で遊んでいるのです。私はと言うと学校から帰っても、だれもいない、冬などは田舎は日暮れが早い、たった一人であるのが非常にさみしいし、つらい。時々3キロぐらい離れたおばあちゃんの家に行っていました。ある時、猛吹雪の夕暮れでしたが、たまたまなくなって行ったことがあります。するとおじいさんが烈火のように怒るんです。怒っている意味は大人になつてよくわかりましたが、その時はただよけい悲しいだけでありました。

後に高度成長期に、生活様式の変化に賃金上昇率が追いついていかない、いわゆる現代貧困化論争が説明した労働力の価値と価格の乖離ですが、その結果、共働きが急速に広がります。その時、私が体験したような子ども、当時言われた「カギッ子」が増えました。「ポストの数ほど保育所を」という保育運動がわきおこります。また、学童保育運動もこの頃から発展します。まさしく保育や学童保育は社会福祉の重要な政策の一分野であります。そのことが感覚的に理解できるんです。保育所は教育施設であるなどと言っている人はたぶんハッピーな人なんでしょう。

私は村の皆さんに育ててもらったようなもので今でも大変感謝していますが、なぜか小・中学校を通じてよい先生にもめぐまれました。そのかぎりでは大変幸せだったと思います。床屋に行けなくて伸び放題の髪もいつも先生にバリカンで刈ってもらっていました。ある時その先生が母に「この子は共産党になるから気をつける」といったそうです。それには次のようなエピソードがあります。当時母は「まる通」、運送店に勤めていました。奥地から馬車やトラックで運ばれてくる材木を北濃駅で貨車に積み替える仲仕の親方がいて、貨車1両いくらかで仕事を請け負うわけです。母はその請負金を仲仕に配分する計算をしていました。それを僕が横から見ていて気づいたのです。皆平均に1割ずつ配分していくのに、親方は1.2割になっていて、他に0.8割の人が一人いる。その人は「さんちゃん」と言って、これも大人になってから納得したんですが、たぶん知的障害のある人だったんでしょう、体が小さくて、重い材木をかつぐためにいつも肩当を背負い、皆からからかいの対象になっていました。作業は、2人が材木の両端を持ち上げて足場を降りてくる人の肩に乗せてやる、見ていると、さんちゃんは太くて重い丸太をいつもかつがされている、親方が降りてきた時は細くて軽い丸太である。わたしは憤慨して母や親方に文句をいうけれど、適当にあしらわれて歯がたたない、たぶんそのくやしさを先生に訴えたんだと思う。こういうな

んといったらよいのか、ませた正義感のようなものが子どもの頃から、生活の貧しさの中で身についた。これも社会福祉研究の原点になっていると思うのです。

## (3)

私は先生にめぐまれたと先に言いましたが、高校へ進学できたのも先生のおかげでした。当時まだ高校進学率は25%から30%の時代でした。本来なら進学できなくて当たり前のところ、先生がなぜか「もったいない」とあちこち奔走してくれて複数の奨学金が受けられるようになりました。

高校は汽車に乗って2時間ぐらいかけて郡上高校へ通学しました。朝、自分の腰ほどもある牛乳缶2本を列車に乗せ郡上八幡駅まで運んで、加工工場の人に引き渡す（彼も知的障害者でした）。帰って新聞配達をするという毎日です。高校では進学クラスに組み込まれ（なぜか自分で選択した記憶がない）夏休みも授業で、周りには熱気があったけれども、私はどうせ大学進学は不可能だとあきらめていたから、この熱気からは傍観者で、妙にひねくれ、すねていた。受験勉強などほとんどした記憶がない。そして中学生ごろからの漫然とした疑問、なぜこの世の中には貧乏があるのか、この疑問がますます膨らんでくる。いつも図書館へ行って本を読んでいた。受験勉強はしなかったけど3年間で日本文学全集を幸田露伴から川端康成ぐらいまでは読破した。いつも図書館にいるわたしに、図書館主任の先生が目をつけ、これを読めといろいろな文献をもって来るわけです。その中にマルクス主義の本もあって、その1冊に私は目の前がバァーと広がっていく思いがした。当時の高校生は受験勉強しながら古典なども結構読んでいて、授業中にエンゲルスの『家族、私有財産、および国家の起源』などが回覧されていた。世の中も騒然としており革命の雰囲気があった。したがってマルクス主義文献も抵抗なく我々の世代は触れているはずである。その1冊とはたしか岩波から出ていたと思うが、スージーとヒューバーマンの『なぜ社会主義をえらぶか』という本です。私ははじめて、貧困が資本制社会の経済法則によって、構造的に生み出されてくるものであることを知った。よく目からうろこが落ちると言うが、そんな感覚です。わたしは漫然としていたけれども、貧困とたたかう、人の役に立つ仕事につきたいと思っていた。大企業に入って自分の地位を確保しようなどとは考えていなかった。やるとしたら福祉関係か、僕を支えてくれたような教師か、医師か、公共的な仕事につきたいと思っていたけれどもそれは夢のまた夢のようなものであった。皆さんは信じられないだろうけど、英語の辞書が買えなくて『蛍雪時代』という受験雑誌の付録単語帳を友達にもらって勉強していたのであるから。これが原点の3つ目です。

## (4)

それがなぜ進学できたか。御母衣ダムであります。莊川に世界最大のロックフィル式ダムの建設がもちあがり、当時の国鉄越美南線、今の長良川鉄道ですが、これに一躍出番が回ってきた。鉄道で建設資材を北濃駅まであげ、そこからトラック輸送です。北濃駅がその基地として拡張されることになり、住家が立ち退き対象になって若干の保証金が入りま

した。ちょうど妹の中学卒業と重なり、妹に高校に行かせてやるか、私が進学するか、母は悩んだと思うんですが、結局私が進学することになりました。ついでに妹は電話交換手になり、郡上八幡電話局に就職、郡上高校の夜間部に行くことになりました。これが私の妹にたいする負い目の原因です。進学といっても4年間、ましてや6年間なんていうのは絶対無理だ。いろいろさがしていると大阪に旧制専門学校から短大になったばかりの府立の社会福祉の学校がある、授業料も国立より安い、漫然と考えていた自分の進路にもあっている。こうして当時の府立大阪社会事業短期大学（今の大阪府立大学社会福祉学部）に進学しました。

この学校は実に多士済済の先生がいて、皇国史観の歴史の先生からアナーキストの福祉の先生まで、右から左まで全部そろっている。学生も後の多くの短大がお嬢さん学校化する前の時代で、もと海軍軍人など実に多彩な社会人がいて、熱気があった。ここでまず孝橋理論の洗礼を受けた。孝橋理論というのは、社会福祉の対象を資本制社会の構造的所産としてとらえる、まさに私が高校のとき目覚めた視点にぴったり来る理論です。孝橋理論についてはその後勉強を重ねいろいろ問題があることがわかったが、その時はとりこになった。孝橋正一先生はただ遠いところからあこがれて見ていた先生だったが、お世話になったのは社会学の中本博通先生です。中本先生が関西一円の未解放部落の社会調査を手がけていて、私はそれを手伝っていました。この時が第2の開眼というか、目からうろこの時でした。今は相当改善されてきているけれども、当時の未解放部落の住環境はそれはとてもひどいもので、まさに人権に関わる状況でした。住宅が密集して建っている、入り口が道路に面していない家がいっぱいあって、家と家の軒下を伝っていくのです。その通路に台所排水が流れている。職業をみても、近代産業の労働者階級に属する人はまれで、おおくの人達は行商などの雑業で生計をたてていました。比較的多い階層が公務員でした。しかしそのほとんどは、し尿、ごみの処理に従事する現業職員です。ことわっておくけれども、現業職員を一般行政職員との関係で差別的にのべているのではありません。「現業職員」という場合の含意は当時の過酷な労働実態をさします。例えばし尿はひしゃくで汲み取り、桶を天秤棒でかついで足場を登ってトラックに積み込むというような過酷な仕事でした。まさに階層化された社会の最底辺で、抑圧され、差別されている人々がいる。この人たちの置かれた状況（住居、教育、職業等々）がまた差別を再生産している。この社会調査によつて日本の社会がかかえる現実に触れました。

この調査が終了後、ある未解放部落の公民館に住みこむと言えれば格好がよいけど、いわば失業者として居候をしていました。その公民館には夜間中学の授業があって、欠席した生徒の給食用のパンを食料に、夜は教室の机を寄せ集めてはそこに毛布を引いて寝ていた。定職をもたない風来坊の生活でしたが、充実していた。公民館を拠点に子ども会、青年団活動をやっていました。差別されている現実をめざめ、社会を変えていこうとする熱をもった同年輩の青年が結構いて、例の大長編『橋のない川』を書いた作家・住井すえさんな

どを呼んで講演会などもやったりしました。このような縁で私はその地域の住民になり、その自治体に就職したのです。これが原点4です。

(5)

自治体労働者となつた私は福祉の仕事にこだわって大半を福祉の現場で働きました。たぶん私を雇った市長さんはシマツタと思ったのではないか。仕事もそれなりに一生懸命やったけれども、社会福祉を発展させる原動力は社会運動の力であるということを、勉強をとおして確信していたので、福祉労働運動や保育労働運動のリーダーに祭り上げられると、引きうけた。地方公務員法すれすれの争議行為を組織したりして、今から思うとよく首にならなかつたものだと不思議に思うんですが、市長さんにしてみると目の上のたんこぶだったに違いない。地域の保育運動にもかかわって、市長の政策批判などもさかんにやっていた。運動をやりながらあちこちの雑誌に雑文を書いていた。これだけは自分の勲章だと思って威張って言えるんですが、その市はこれも地域の保育運動が生み出したものだが、各小学校区に公立保育所が1カ所あって、保母（今は保育士といい、男性もいる）が約500名近くいた。そこで3年かけて約100名の保母の増員配置を実現し、労働条件と子ども達の保育条件を改善しました。ちょうど高度成長期の最後、1972年から74年にかけての時期で条件もよかった。福祉見直しなど福祉政策の抑制が始まる直前だったからです。

しかしどうしても絶ちがたいのが社会福祉研究への道です。その後、わたしは在野の研究機関に所属して、論文を発表したりしていましたが、本格的に勉強したかった。幸い地方自治体には夜働いて、昼、時間が空く職場が結構あるんです。そういう条件を生かして働きながら大学院に通いました。

以上が福祉研究に入っていく原点の話です。ところで、貧乏をしないと福祉の志が育たないのか、私はそうは思いません。自分のことを振り返り語ってみるとたまたまそれが原点になっていたということであって、ハッピーに育った人でいい感性を持つ人はいっぱいいる。要は人生観が大事であって、自分だけのしあがって富を追求するか、まあまあなんとか食えたらよいから、何か人の役に立つ仕事がしたいと考えるか。自分より立場の弱い者に向かっては権威主義的に振る舞い、強いものにはぺこぺこして引き下がるか、また毅然とした生き方をするか。これらはすべてその人のもつ感性と人生観によります。貧乏で育った人でも、富の追求を人生最大の価値と信じて疑わない人はいっぱいいる。私は「知」の力が大変大切だと思っており、そういう意味では医療、教育、福祉などのプロヘッションにはリベラルアーツが大事だと思います。皆さん、いい文学に接してください、哲学する人間になってください。また英雄の歴史学ではなく、民衆の歴史学を勉強して前谷村定次郎のような人物に接し、感性を磨いてください。感動する映画もいっぱい見て、感動する心を育ててください。これは私の高校時代の経験から言って間違いないと確信しているので、皆さんに勧めるのです。

## 2. 「学」の体系

人類が蓄積してきた「学」の体系は膨大なものであり、今なお、それは宇宙が膨張するように拡大しつづけています。哲学何千年とかいいますが、哲学などは最も古くから膨大な蓄積がある。4桁の年月までいかなくとも、経済学やテクノロジーの緒分野は何百年です。これに比べたら「社会福祉学」などと言っているが、そもそも学の体系として存在するのかということも言われている。私の見るところ体系はまだ未完成です。皆さんがこの学部で学んだ福祉のカリキュラムで、福祉を学んだと思ったら大間違いで、ほんの一部に接したにすぎません。そこで、今後の勉学のために私が考える「社会福祉学」の体系をのべてみます。

### (1)

基礎は社会問題研究です。これは対象研究とも言われている分野で社会福祉学などと言われるずっと前から伝統的な貧困研究があります。有名なチャールス・ブース（1840～1916）、シーボーム・ロントリー（1871～1954）の研究などがそれです。日本でも貧困の実証研究は相当な蓄積があり、江口英一編『日本社会調査の水脈』法律文化社でその一端にふれることができます。

最近では社会福祉の対象を「ニーズ」におく、いわゆるニーズ論がおおはやりですが、ニーズ論の特徴は対象の社会構造的な分析を欠いていることです。対象を社会問題として措定するということは人々の苦悩を社会構造的に分析すると共に、その苦悩が基本的人権を侵害された状況として認識することです。例えば最近急速に増えてきたと言われる児童虐待、

child abuseなどは「新しい社会問題」と呼ばれています。（かつては貧しさから子どもに物乞いさせる、廓＝くるわに売り飛ばすなどが児童虐待の概念であった）。しかし「新しい社会問題」は一見個人の属性に見えるので、虐待する親の心理構造だけに目が行きがちですが、社会的背景を伴っています。超過密な労働、不安の時代と言われるように倒産やリストラ、失業の不安、狭くて窮屈な住居に家計の逼迫など資本制社会は社会的にハイリスクを抱えた虐待予備軍を社会階層として再生産している。また、地域では人々の社会関係が萎縮して孤立が深まって虐待を生む条件が広がっている。子育てには体力と共に知力もいるけれども、十分な教育の機会から排除されてきたため誤った文化状況に支配されている。（例えば“罰”の価値を信奉している）。社会問題視点とはどのような水路を通過して問題が発生してくるのか、そこを社会構造的に分析することにほかなりません。そうすると、虐待されている子どもたちは、個人の問題ではない、虐待する親を個人の罪と見るマルサス流のレッセフェール思想から解放されて、子ども達を救い出そうという人権感覚が広がります。同時に虐待を生み出す社会状況を変革していこうとする社会運動の視点がでてくるのです。ニード論では決してこのような論理は出てきません。

### (2)

第2に、社会運動研究があります。人々の人権がおかされた状況は普通、潜在化してい



る。児童虐待が統計上急速に増えつづけているのは、実態が増加したというよりも、潜在していたものが顕在化した、社会の表面に現れたということです。するとなぜ顕在化してきたのか、それは社会運動の力です。児童虐待の場合、NPOの果たした役割は大変大きなものがあります。名古屋にキャプナCAPNA(子どもの虐待防止ネットワーク・あいち)というNPOがありますが、同様なNPOが東京、大阪に早くからあり、最近では各地に生まれてきました。相談活動のホットラインをもち、医師や保健婦、教師、福祉関係者など子どもにかかわる専門職への啓発(講演会など)やマスメディアを通じて社会への啓発、調査研究、出版活動などを通して世論を動かしてきたのです。10年以上にわたる活動が昨年6月、児童虐待防止法の成立を実現し、10月から施行されました。

社会運動というと60年代の保育所づくり運動のように、街頭での署名、議会への請願、デモンストレーションだけではありません。このようにNPOやセルフヘルプグループは運動機能を持っています。ボランティアは日本では政府の育成政策により、社会福祉の国家責任の肩代わりの役割をも持たされているので、なんとなくうさんくさい目で見られがちですが、発祥の地イギリスでは無償性ととも、政府からの独立、自律性を命とし、社会運動団体として認められています。Age Concern EnglandやChild Poverty Action Groupなどはみなそうなのです。

今、高齢者の介護問題が社会福祉の対象として大きな位置を占めるようになっていますが、これも語り尽くせぬ数々の社会運動の力があって社会福祉の対象にまで押し上げてきたのだと言えましょう。

現代の社会は人々の人権を抑圧する状況を広範囲に生み出す。社会運動の力がそれを社会問題化する。その時世論が動いて、現代の福祉国家では、政府がなんらかの政策対応を迫られる。第3は政策研究です。

### (3)

実は社会福祉学研究の分野に社会福祉原論があります。原論とは文字通り現代の社会福祉を原理的に考察すること。この考察には歴史研究が不可欠なのですが、要するになぜ現代の国家は社会保障、社会福祉のような社会改良政策を必要とするようになってきたのか。社会保障、社会福祉を発展させる原動力は一体全体何か。そもそも社会福祉とは何か。等々が原論のコアの課題といえましょう。原論研究には歴史研究とともに、論争史を総括することも大事ですが、論争を通じて到達したひとつの観点が、現代の国家は、経済学で言うところの階級闘争、これを社会学の概念で言うと社会運動の圧力に押されて、やむを得ざる譲歩の結果として、社会保障、社会福祉政策を余儀なくされる、ということです。この観点は歴史研究によって論証可能です。したがって、憲法や福祉各法にかかげられた理念とは裏腹に、現実の政策は常に限界を持っていると言うことが重要なのです。これが政策研究における政策批判の意義であります。政策の批判的研究を通して、めざすべき方向を指し示すことが研究の課題である。

ついでに言うと、政策研究には私が官房学派とよんでいる流れがあります。この学派は原論不在の上、政府の政策をいかに合理的に展開するかという、一種の政策技術論をその特徴としている。多くの人が政府の審議機関に入って実践的にもそれなりの役割を果たしているのだが、善意でがんばっても現代の社会福祉は先に述べたような本質を持っているのだから、がんばりにも限界があり、その理論も限界を露呈しています。

## (4)

社会問題→社会運動→社会福祉政策と述べてきました。いったい人々を社会運動にかりたてるもの、また政策を先導するものは何でありましょうか。それは理念です。日本国憲法は13条で幸福追求の権利を、25条で生存権をうたっています。幸福追求の権利を含む自由権は、近代ブルジョアジーが封建勢力との闘争を通して獲得したもので、フランス人権宣言やアメリカ独立宣言に結実していることはよく知られている。生存権が具体化したのは、1920年代、ドイツ革命の混乱の中から生まれたワイマール共和国、この権力は労働者の利害をある程度代表する勢力とブルジョア共和派が合体した権力だと言われているけれども、ワイマール共和国憲法が最初であると、これもよく知られている。その後、第2次世界大戦の歴史的経験の中からノーマライゼーションの理念がでて、大きな影響をあたえます。これらの古典的理念をしっかりと押さえた上で、QOL (quality of life) や「参加」とか「自己決定」などをかかけていくことが研究の背骨を支えることになります。理念は偉い先生の頭の中に突然浮かんでくるものではありません。ノーマライゼーションはデンマークの知的障害児の親たちの運動をバンク・ミケルセンその他が理念化したように、生きた現実の生活と運動の中から生まれてくるものであり、私達は将来に渡って新たな理念を生み出すことができるかも知れません。

## (5)

さて、政策を具体化し実践するのは福祉労働です。福祉労働者は政府の政策を実践するわけですから、ふだんに政策の影響を受けている。例えば生活保護の現場を担う社会福祉主事の仕事を考えてみると、政府の保護引き締め政策により、人の役に立ちたいという彼の願いをしばしば危機に遭遇させる。しかし他面では、福祉労働も社会運動の影響をたえず受ける。私が福祉事務所に勤務していた1960年代前半、日本の社会保障運動の金字塔、朝日訴訟の第1審浅沼判決がでました。私達は職場でこの判決文の研究会を組織し、改めて生存権の意味を理解したものです。このように社会運動はまた福祉労働を規定します。

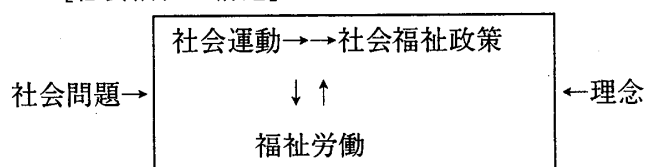
今述べた福祉労働の位置に関する命題は、実は私の説ではなくてすでに1970年代に盛り上がった福祉労働論が解明したことです。いま日本の福祉研究では、労働論がすっかり衰退して、私の大学院の恩師、真田先生のいう「指針なき専門主義」、一種の援助技術の体系が一人歩きをしています。しかし、援助技術というのは、福祉労働の労働過程の領域であります。肝心なことは指針、つまり福祉労働の位置と役割、その中で労働者が対象とする

人々の側に立って、生活と人権を守る労働を確固として確立するためには、いったい何が必要なのか、これを解明することが非常に大事であります。

実は援助技術の体系、ソーシャルワーク理論の中にも、これを考える価値視点がいくつがあることはこの授業で私が強調してきたので皆さんは知っているでしょう。それは、ソーシャルワーク理論自体が近代市民社会の理念を取入れ発展してきたからにはほかなりません。これらの成果も含めて福祉労働論という分野を確立することが必要です。

結論を言わねばなりません。私が考えている社会福祉学の体系は、社会福祉原論をベースにして、その上に社会問題研究、社会運動研究、理念の研究、社会福祉政策研究、福祉労働研究を積み上げることです。原論には歴史研究も入ります。これは現代社会福祉の構造に対応しています。

#### [社会福祉の構造]



この項の最後に研究姿勢について一言述べなければなりません。皆さんは次の文章をどう思いますか。

「(福祉サービスの有料か無料かは) 優れて経済問題であるから、どちらを選択するかは経済学の論理に基づいて合理的に考える必要があるということになる。国民の権利とか、あるいは国の義務とかいったタームによるのではなくて、経済理論のロジックによって考える必要がある」(大野吉輝・『季刊社会保障研究』NO24、1988、社会保障研究所)。

1980年代は折りからの福祉見直し、福祉改革の流れに乗って福祉サービスの有料化が推進された。その行きついた先が介護保険であります。厚生省の調査でも約半数の高齢者が自己負担分を払えないため利用抑制が進んでいると言っています。福祉研究は常に国民の生活実態をよく見て、苦しんでいる国民の側に立つことが大事ではないだろうか。この文章ほど反国民的な価値視点はないと私は思うが、近年の若い研究者には没価値性の研究が多くなっている。私は社会福祉学研究には国民の側に立った確固とした価値視点が必要であると思います。

### 3. 福祉の現場へ出る人へ

最後に福祉の現場へ出る人に言葉を送りたい。それは悩む労働者になれということです。さきほども言いましたように、福祉の現場は政策の影響をふだんに受けているから、皆さんが学んできた理念どおりでは決してありません。例えば老人保健施設へ就職したとする。人手が足りないから、たくさんの方がベットに縛り付けられている。これは「抑制」と言って看護学の体系では合目的的なのですが、福祉の立場からはあってはならないことなので

す。どうしてだろう、これを改革するにはどうしたらよいのだろう、どこから手をつけるべきか、真剣に悩むことが大事です。悩むことを忘れると、大勢に流され、そのうちに感性も麻痺して福祉労働自体が貧困化していきます。人格や能力も貧困化します。ただ一人で悩んでいては、方向が見つかりません、ストレスも強くなります。どうするか。職場でケースカンファレンスを組織してその場を問題提起の場として活用するとよい。悩みを共有化するわけです。そして、皆で討論し、解決の方向をさぐることが大事なのです。

また、できたら外の研究組織に参加して、外部の空気を吸って欲しい。医療や教育や福祉はプロフェッションとあって、精神労働をその本質としています。したがってこの分野は研究活動が大変活発で研究団体がたくさんあります。日本社会福祉学会なども多くの現場の人々が参加している。外の研究団体とつながりを持って、現実の壁に押しつぶされないうよう、それでは学生の皆さん、これから社会へ出ていく皆さんの奮闘を祈ります。

皆さんこの3年間、共に学ぶことができ誠にありがとうございました。また同僚の先生方、事務の方々には大変お世話になりました。ほんとうにありがとうございました。(了)